

# 治水の偉人伝

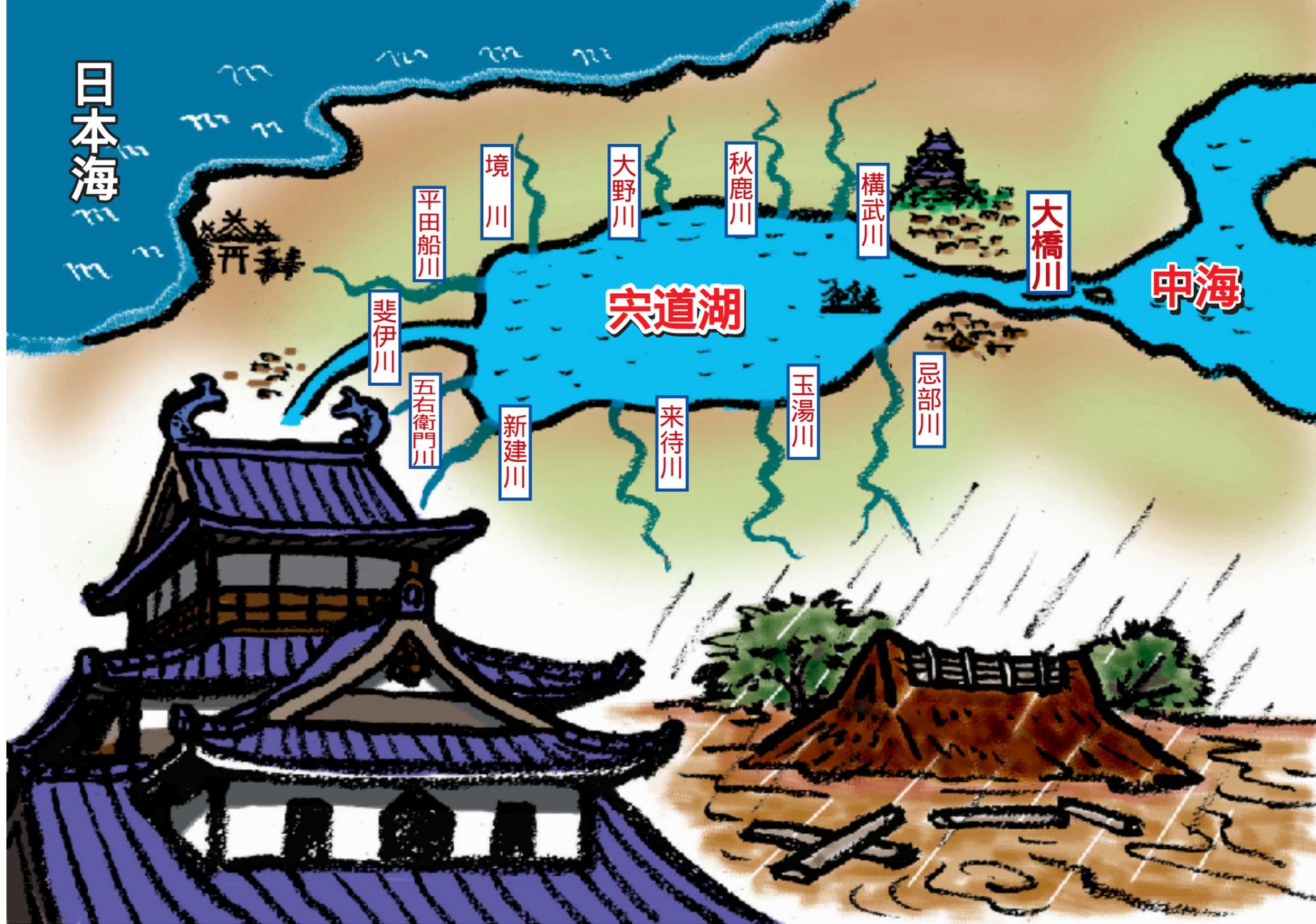
きよ はら た へ え  
**清原太兵衛**

1711~1787



原作 小室孝太郎  
絵 寺戸良信





# 1

ここは水の都、松江。

江戸時代、この地方を治めていたのは

松平家・松江藩でした。

松江城は宍道湖に面して建てられていて、

松江のまちは城下町として栄えていました。

しかし水の都ゆえの悩みがあったのです。

この宍道湖には斐伊川をはじめ、

たくさんの川が流れ込んでいるものの、

出口は大橋川ひとつしかなく、

ひとたび大雨が降るとたちまち宍道湖はあふれ、

松江のまちは水浸しになってしまいうのです。



## 2

聖徳元年一七二一年のこと、

松江の城下に、ほど近い法吉村の清原家に、

元気な男の子が産まれました。

太助と名付けられた男の子は

常福寺の寺子屋に通い、読み書きや算盤を習い、

たいへん頭の良い、負けず嫌いな子供に育っ

ていきました。



### 3

松江の度重なる洪水の様子は、  
この幼い太助の目にもしつかりと  
焼き付けられていました。  
大雨が降るたびに、田んぼや畑が流され  
悲しむお百姓さんの姿を見てきました。  
どうしたら洪水を防ぐことができるのか、  
太助は子供心に、思いを巡らせておりました。



享保十年一七二五年、

15歳の元服を迎えた太助は、名前も太兵衛と改め、大人の仲間入りをしました。太兵衛は思いました。

「松江のまちを洪水から守るには、

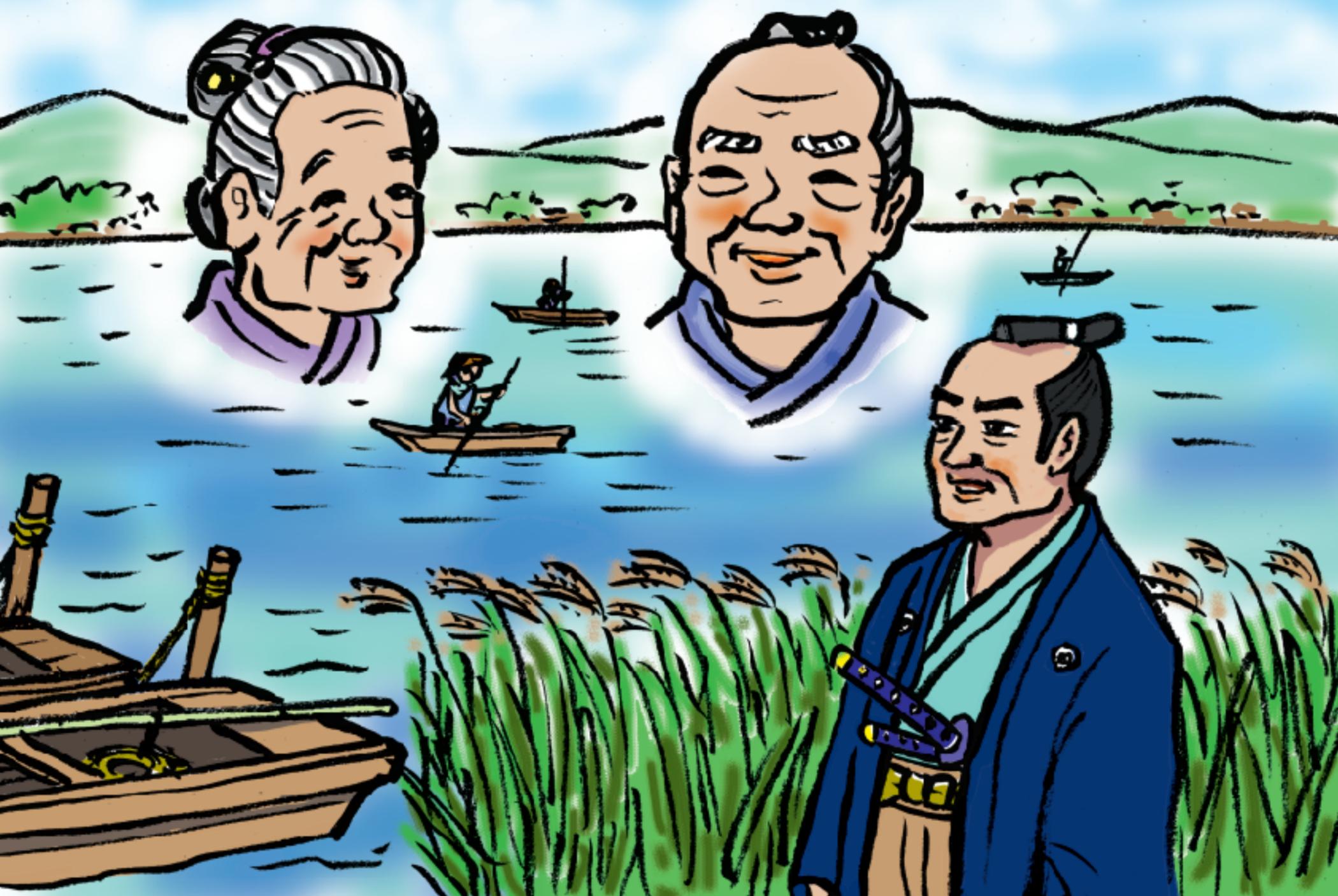
なんとしても松江藩に仕えて

行動を起こすしかないなあ……」。

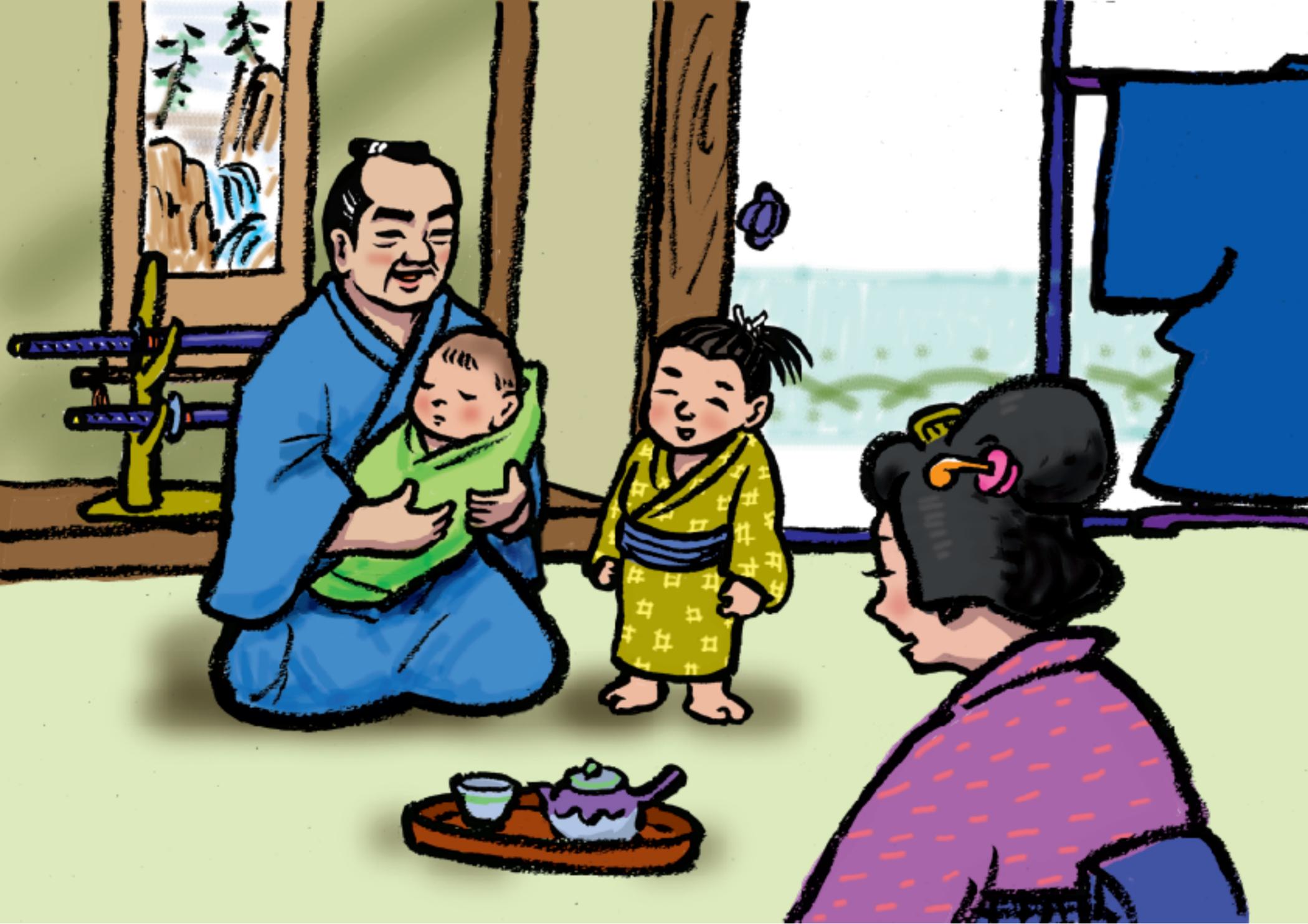
そして青沼六郎左右衛門という松江藩のお侍に仕えることになりました。

毎日お屋敷の掃除やお使いをしながら、

お侍になるための勉強や剣術に励んでおりました。



青沼様にお仕えすること15年、  
太兵衛は30歳になっていました。そして、  
やっと家老の三谷様のはからいで松江藩に  
仕えることが決まったのでした。  
宍道湖の治水を考える太兵衛は、ひまを見ては  
宍道湖周辺を歩いて回りました。  
治水に備えての調査のためでした。  
太兵衛40歳のとき、かねてお仕えしていた  
青沼様が亡くなり、その7年後には  
母親も亡くなりました。  
「もう少し長生きしてくれれば、親孝行  
できたのに。きつとりっぱなお侍になって、  
宍道湖の治水をやりとげますから、  
みていてください」  
太兵衛はお母さんのお墓に誓ったのでした。  
そして翌年には小さいながらも屋敷をかまえ、  
結婚して妻の智（さと）と暮らすことになりました。



結婚した太兵衛夫婦には、なかなか子供が出来ませんでした。二人は養子を迎え、清原家を継がせることにしました。ところが、養子を迎えた数年後にはなんと太兵衛夫婦のもとに男の子ができました。百助と名付けられ、兄弟二人は元気に育ち、兄のほうは江戸屋敷に仕え、跡継ぎとしての道を歩んでおりましたが、突然の病気に見舞われ、江戸の地で亡くなってしまいました。悲しみにくれる太兵衛一家でしたが、弟の百助が松江藩に仕えることになりました。



清原太兵衛は、松江藩において、次々と重要な役職をこなしておりましたが、その折々にも  
宍道湖の治水のことは頭から離れません。

この近年大洪水が起こることなく平穏な日が続いていましたが、太兵衛は思いました

「こんなときこそ洪水に備える対策を考えておかねば……」。そこで、

宍道湖を一望できる朝日山に登り、  
宍道湖の水は浜佐陀から日本海へ流すほかに  
方法は無い、と決心し、宍道湖の水を流す  
新川の計画を藩に陳情しておりました。

しかしたくさんのお金が必要なこの計画は、  
なかなか取り上げてもらえませんでした。



8

しかし、

やがて恐れていた水害が起きてしまいました。

家が流れ、田畑も水につきり農作物は

全滅しました。

食べるものもない飢えた農民たちは

グルになって、あちこちの米倉を襲うなど、

松江のまちは大変なことになっていました。

「このままでは松江藩の未来はない、

洪水対策を一時も早く進めねば、」

太兵衛は強く決心し、時の藩主松平治郷公に

新川の開削を強く強くお願いしました。



太兵衛の永年の悲願であった宍道湖の治水計画は、藩主松平治郷の心を動かしました。

太兵衛の新川計画は、宍道湖の水を流す

水路だけのものではなく、宍道湖と日本海を結ぶ運河として、経済の面でも松江藩が

繁栄するように考えられていました。

こうした太兵衛の計画が認められ、

浜佐陀から恵曇へ続く新川開削が許可されました。

清原太兵衛73歳にして、ようやく宍道湖治水計画が実現することになったのです。



さて、いよいよ念願の工事が始まりました。  
近郷近在から多くの人夫が集まり、  
太兵衛の計画通りに杭打ちが始まりました。  
しかし、この事を知った近くの農民達は  
反対します。「そげなことされたんじゃ、  
うちの田んぼが減ってしまうがな」  
「そげだ、そげだ、それにこの辺は佐太神社の  
神さんが守っちよられる土地だけん、  
そげな事すると罰（ばち）があたくわ」。  
せっかく打ち込んだ杭は、あくる朝になると  
みんな抜かれている始末です。



11

毎日毎日じゃまをされ、工事が進みません。

そこで人の目につかない夜中に

作業をすすめていきました。

この辺りの川には夜になると出てきて、

土を掘り起こすカニが多くなりました。

そのカニはいっしか「太兵衛ガニ」と

呼ばれるようになりました。



夜中に行ってきた杭打ち工事が終わり、土を掘り起こす作業が始まりました。しかし、柔らかい泥は掘っても掘っても流れ込み、なかなか思うように進みません。

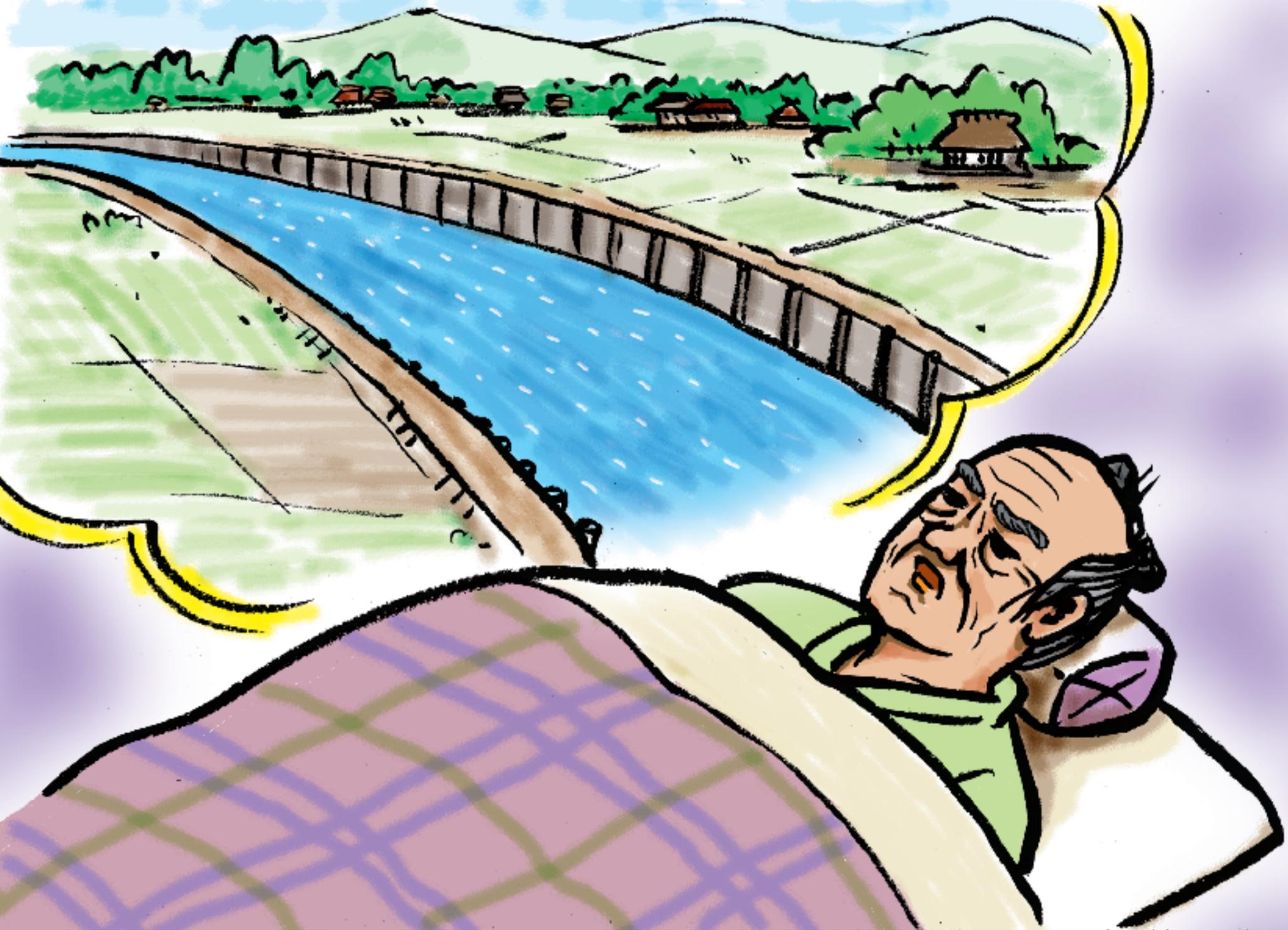
そこで太兵衛は近くの佐太神社にお参りし、誓いを立てました。「どうかこの清原太兵衛に力をお与えください。今日から百日間お参りさせていただきます。この工事を完成させて頂けるなら、私の命を差し上げてもかまいません。」

この日から工事の監督をするかたわら、神社へのお百度参りが続きました。



13

工事の途中で大きな岩が掘り出されました。  
太兵衛はこの岩で手水鉢を造り、  
神社に奉納しました。その手水鉢は現在でも  
神社の境内に残っています。  
こうした太兵衛の願いが通じたのか、  
工事は順調に進んで行きました。



佐陀川開削の工事は、もう惠曇まで

達していました。しかし、この頃、年とった

太兵衛の身体が悲鳴を上げました。

なんとか完成までは、と自分の身体にムチ打って

工事に取り組んできましたが、

太兵衛七十六歳の十一月二十八日、

とうとう力尽きてしまいました。それは、

完成を目前にしてのことでした。

いつの日か佐太神社の神様にお約束したとおり、

自分の命を捧げて工事を成し遂げたのです。



15

年が明けると、完成式典が行われました。

工事の関係者などには松江藩から感謝の品などが贈られ、明るい笑顔が並んでいましたが、

ただ主役の清原太兵衛の顔だけは  
ありませんでした。

太兵衛の考えた通り宍道湖の水は佐陀川を  
日本海まで一筋に流れました。

それまで沼地だった所は立派な田畑に変わり、  
みごとな米どころとなりました。



宍道湖の水位も下がり、

松江の街が水に浸かることは

めっきり少なくなりました。

そして川には大きな船が荷物を

いっぱい積んで行き交い、

松江藩の経済にも大きな貢献をしていました。

こうして命をかけて貫き通した

清原太兵衛の佐陀川工事は終わりました。

太兵衛の遺言通り、佐太神社周辺には

沢山の桜の木が植えられ

人々の心を癒してくれる場所にもなったのです。